



筆

## 女性のはたらき

——オセアニアの未来をにあって——

山 口 修\*

### 伝統文化と女性

オセアニアの伝統的社会にあっては社会構造を支えるものとして氏族関係とならんで性区別が重要な意味をもっていたし、現在でもかなりそれは続いている。見方によれば、これは性による差別とも受けとれるが、本来そのような意識がはたらいていたのではなく、男女の適性に応じた分業が社会慣習として保持されてきたと考える方が妥当であろうか。カヌー作り、それに乗っての遠洋航海、漁労、そしてかつては戦いなどが男の役割であったのに対して、タロイモなどの栽培、料理、育児などにたずさわるのが女性の仕事であることが多いようである。性による分業は文化的な活動の中にも反映されていて、たとえば音楽や舞踊のパフォーマンスはごく2～3の種類を除いてほとんどがどちらか一方の性だけによるというのがオセアニア全域に共通して見られる演奏慣習であった。音楽についてももう一つ興味深いのは、作曲ないし作詞の仕事が主として女性の任務であったことであり、ヨーロッパやアジアの多くの国々で男性が主たる作曲家であることとくらべてユニークである。

もっとも、19世紀以来外界との接触が急速にすすむにつれて、社会慣習も変化を余儀なくされ、混合のパフォーマンスによる新しいジャンルの音楽舞踊を次々と生み出したり、作詞・作曲・振付にも男性が積極的に参加するなど大きく変わってきている。しかし労働に関する限り伝統的形態のものについてはほぼ従来通りのままであるようである。ただし、学校や会社組織といった「近代的」な仕事の間が増えるにつれ

この方面では男女平等の方向にもっていこうとする方針が目立っているように見える。

### 新しいオセアニアに貢献する女性たち

ほとんど島毎に言語や習慣を異にするオセアニアでは純粋に自律的な国家を作るのが困難でそのために小さな国々が次々と独立する現在にあっても相互に依存する連帯意識が強くはたらいっている。たとえば教育を例にとるなら、初等・中等教育は自国（自地域）で充実させるべく努力は払っているものの、大学等の高等教育ともなると、それは不可能に近い。そこでかれらは協力しあって南太平洋大学 University of the South Pacific というものを創設した。ミニ国連大学ともいえる USP は文字通り南太平洋全域の住民の高等教育を目的として、本部をフィジーにおき、センターと称する分校をできるだけ多くの島に設置するという方針をとっている。そしてそれぞれのセンターが独自の方式で地域のサービスに力を注いでいるのである。こ



写真1 ミクロネシアの伝統的な夜の集会でのボナベの女性

\*山口 修 (Osamu Yamaguchi), 大阪大学, 文学部, 美学科, 音楽学講座, 助教授, M.A. 民族音楽学



写真2 南太平洋大学 (USP) の拡大奉仕部で通信衛星による放送施設で働く女性

の新しい仕組の中で各地で女性がはたす役割が大きいことは想像に難くない。

いま私の手元に Pacific Perspective という雑誌がある。その第11巻第2号は“Pacific Women on the Move (活動する太平洋の女性たち)”という特集号になっている。目次を眺めてみると、主なものだけでも次のように多彩である。

「発展過程への女性の統合」(バヌアツの女性たち共同執筆)

「新しいサモアのビジネスウーマン」(共著)

「トンガにおける女性協同組合」(共著)

「南太平洋大学における女性たち」(マージョリー・クロコンブ)

「活動するフィジーの女性たち」(エシテリ・カミカミザ)

「トンガ女性の変動する役割」(メレセイニ・ファレタウ)

「女性連合と農村発展」(ペニー・シューフェル・メレイセア)

「村落における女性——女性たること、食料そして自由」(ゼマ・ボラボラ)

「太平洋の教会女性が語ること」(グウェン・デヴェレル)

「サモアにおける結婚と離婚」(ヨアネ・アサレレ・アフォア)

ここに挙げた中で4番目のクロコンブ女史(写真3参照)の記事<sup>1)</sup>を参考にして、次に USP での女性の活躍について記そう。

### 南太平洋大学における女性たち

先に記したように USP では多くの島にセンター(分校)を設けて各地域の状況に応じた教育活動を推進するという方針がとられている。現在のセンターの数は9つで、これよりも増えることは将来あり得ることであるが、現在まだ具体的な計画はない。これら9つのセンターの指導者たちはそれぞれ助言委員会を構成していて、そのスタッフの数は次の通りである。

センターの場所	男	女	合計
クック諸島	8	2	10
フィジー	4	2	6
キリバス	4	1	5
ニウエ	4	2	6
ソロモン諸島	8	2	10
トンガ	8	2	10
ツバル	4	1	5
バヌアツ	1980年の段階でまだ結成されず		
西サモア	4	1	5
合計	44	13	57

表からわかるように女性の指導者は約4分の1で、男性と対等であるとはいえないけれども、他地域の大学(たとえば日本)とくらべれば非常に進歩的といつてよいだろう。そういえば、グァム大学の学長も女性である。



写真3 南太平洋大学 (USP) の拡大奉仕部にて

左からマージョリー・クロコンブ女史(部長代理)、ハワイ大学太平洋学部門からの交換留学女子学生、ピオ・マノア氏(USP教育学部英語文学講師)

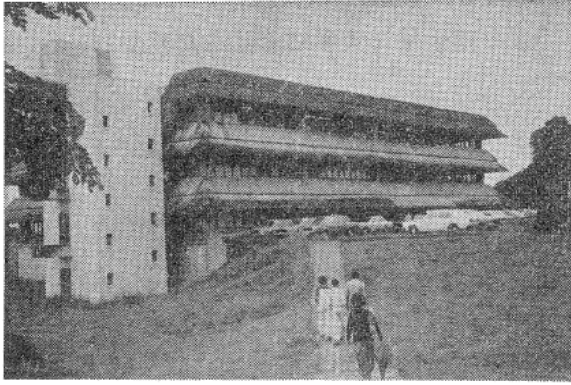


写真4 南太平洋大学 (USP) 図書館

ここには充実した太平洋コレクションがあり、有能な女性司書が勤務している

さて、上層部はともかく、実際の教育はどのようなもので、女性がそこにどのようにかかわっているのでしょうか。すべてのセンターに共通していることは単に学科授業だけでなく、いわば生涯教育といえる活動に重点を置いていることである。そして各地の伝統的技術を基礎にして民芸品などの製作を教えているケースが多いようである。たとえばキリバス（旧ギルバート諸島）では織物、フィジーでは木工といったように。しかしそれだけではなく、共通語として必要な英語教育、作文の練習、文芸作品（詩や物語）の創作、それらの出版技術などがユニークなプロジェクトとして組み込まれているのが面白い。卒業生の中からは評論活動を始めたフリーライターもいるという。

クロコンブ女史は、喜ばしいこうした状況を報告しながらも、上層部での女性の活躍がもっと盛んになって欲しい気持ちを切々と述べている。実質的なところばかりでなく、オピニオン・リーダーとしても女性がはたす役割がもっと大きくてもよいのではないかと考えているのである。

### 性を超えて

それにしても近ごろ女性解放の叫びが各地できかれるが、統計的な数字を出してこうした事柄を論議する時代が早く過ぎて欲しいものだと私は思っている。逆説的にいえば、ある雑誌が女性問題の特集記事として扱うことは、とりもなおさず女性が差別されていることを印象づけているにすぎない。

女性の社会的地位が高まるためには男性の理解と協力が必要であることは自明の理であるし、一方女性の側での意識革命も進まなければならないことも事実である。そのようなことが達成されるまでの道はまだまだオセアニアといえども遠いものである。

注1) CROCOMBE, Marjorie Tuianekore (1982)  
"Women at the University of the South Pacific" Pacific Perspective 11/2 :  
24-28.